

中秋の名月

2017年の中秋の名月は10月4日。十五夜とも言われ、月見するにはもっともよいとされています。月見の習慣は古く、9世紀ごろに中国から伝来しました。以来、月を見て詩歌を詠んだり、祈りを捧げたり、月を愛でる風習が続いています。当然、中秋の名月=満月と思いがちですが、満月であることはまれで、たいてい1日か2日ずれています。2017年10月の満月は6日です。一体、なぜ満月ではないのか。そして今年は、9月ではなく10月なのか——。こうした疑問について考えてみました。

昔から人々は、月のパワーを信じ、神と崇め、月の満ち欠けと共に暮らしてきました。「十五夜」とは、人々が月に祈りをささげる行事の一つです。

「十五夜」は旧暦の15日の夜のことで、新月と呼ばれる月が出ないときから満月になるまでおよそ15日ほどかかることからそう呼ばれています。そのためこの考え方であれば毎月十五夜はあるのですがもう一つ十五夜には「旧暦8月15日の夜」という意味もあるので「十五夜」といえば「中秋の名月」のことと考えて良いのです。

また、「中秋の名月」とは”秋の真ん中に出る満月“の意味です。旧暦では 1月～3月「春」
4月～6月「夏」
7月～9月「秋」
10月～12月「冬」となります。

湿度が低く、空気が澄んでいる秋の空は、月を觀賞するのにもっともよい季節。また満月は豊穡の象徴とも見立てられた

満月のなかでも中秋の名月が特別なものであるのは、やはり暦と関係します。旧暦では、7月、8月、9月が秋にあたり、その真ん中(中秋)にあたる8月は、ちょうど稲の収穫前後。月の満ち欠けをカレンダーにして農作業を進めてきた日本人にとって、月は祈りを捧げる対象であり、また満月は豊穡の象徴とも見立てられました。団子やその時期に収穫される里芋などを備え、今年の実りに感謝したのも、自然の流れと言えるでしょう。

また秋は、「天高く、馬肥ゆる秋」と比喻するように、空気はとて澄んで、空が高く見えます。これは夏に比べて湿度が低いため、水蒸気が少ないことが理由のひとつ。冬の空気も澄んでいますが、地球から月を見る冬は高い位置にあるうえ、気候的にも寒い觀賞向きではありません。秋の満月は觀賞するのはとてよい条件であることも、現代でも月見が親しまれる理由と言えるでしょう。

「十五夜」とすすきの関係は？

すすきは、魔よけの力があり、月の神様を招く依り代(よりしろ)として供えられたとされています。また、お月見に供えたすすきを軒先に吊るすと「一年間病気をしない」という言い伝えも残っているそうです。



十五夜とウサギには次のような言い伝えがあります。

昔、あるところにウサギとキツネとサルが暮らしていました。ある日、3びきは疲れはてた老人に出会います。老人はおなかのすいて動けない、何か食べ物を恵んでくれと言い、3びきは老人のために食べ物を集めに出かけました。キツネとサルは食料を捕まえて持ってきますが、ウサギは何も捕って持ってくるのが出来ませんでした。

ウサギはもう一度探しに行くので火を焚いて待っていて欲しいと伝えて出かけていきました。サルとキツネは火をたいて待っていましたが、手ぶらで帰ってきたウサギを見て、ウソつきだとなじります。

するとウサギは「私には食べ物をとる力がありません。どうぞ私を食べてください」といって火の中にとびこみ、自分の身を老人にささげたのです。

おじさんは悲しみ、ウサギの清らかな魂を誰しも見ることができるようにと月の中に写します。

実は、その老人は帝釈天(タイシャクテン)という神様で、3びきの行いを試そうとしたのです。

もとの姿に戻った帝釈天は、そんなウサギをあわれみ、月の中にウサギをよみがえらせて、みんなの手本にしたそうです

